

# オホーツク文化期目梨泊遺跡住居跡出土の直刀

川名 広文

## 1. はじめに

本稿で採りあげる直刀は、オホーツク文化を代表する屈指の遺跡として学界に知られる道北枝幸町の目梨泊遺跡にあって、近年実施した学術調査により第7号住居跡と呼称する竪穴から出土した新資料である。

調査は札幌大学文化学部川名ゼミナールが主体となり、地元オホーツクミュージアムえさしの協力を仰ぎ、2004年7月の詳細確認調査（分布調査・竪穴測量）を経て、05年8月に住居跡覆土上層の発掘、そして06年8月に覆土下層・床面の精査および完掘という手順を踏んだ<sup>\*1</sup>。

この鉄刀は05年8月の本調査時に第7号住居跡覆土中から発見された<sup>\*2</sup>。小文では、先行研究を押さえたうえで、本資料が提示する新たな情報や関わる若干の知見を認め、さらに墓制や社会組織の一端に言及したいと思う。

## 2. 遺跡の概観

目梨泊遺跡はオホーツク文化期に属する墓域を伴う集落跡である。枝幸町の北端を占める目梨泊に所在し、オホーツク海に突き出た仰ぎ見る絶壁、神威岬によって形成された緩やかな内湾に面する標高16～22mに及ぶ海岸段丘上に立地する（図1）。

これまで、1968～74年の北海道大学北方文化研究施設による数次にわたる調査で第一号～四号竪穴住居跡が、1990～92年の町教育委員会主体による広範囲な行政調査で第1号～4号住居跡が、筑波大学・札幌大学の共同調査で第5号～6号住居跡（各一部）がそれぞれ順に発掘ないし試掘確認されてきた。また併せて、都合48基余の墓坑が確認されてきている [大井 1974、佐藤 1988、佐藤 1994、高島他 2004]。

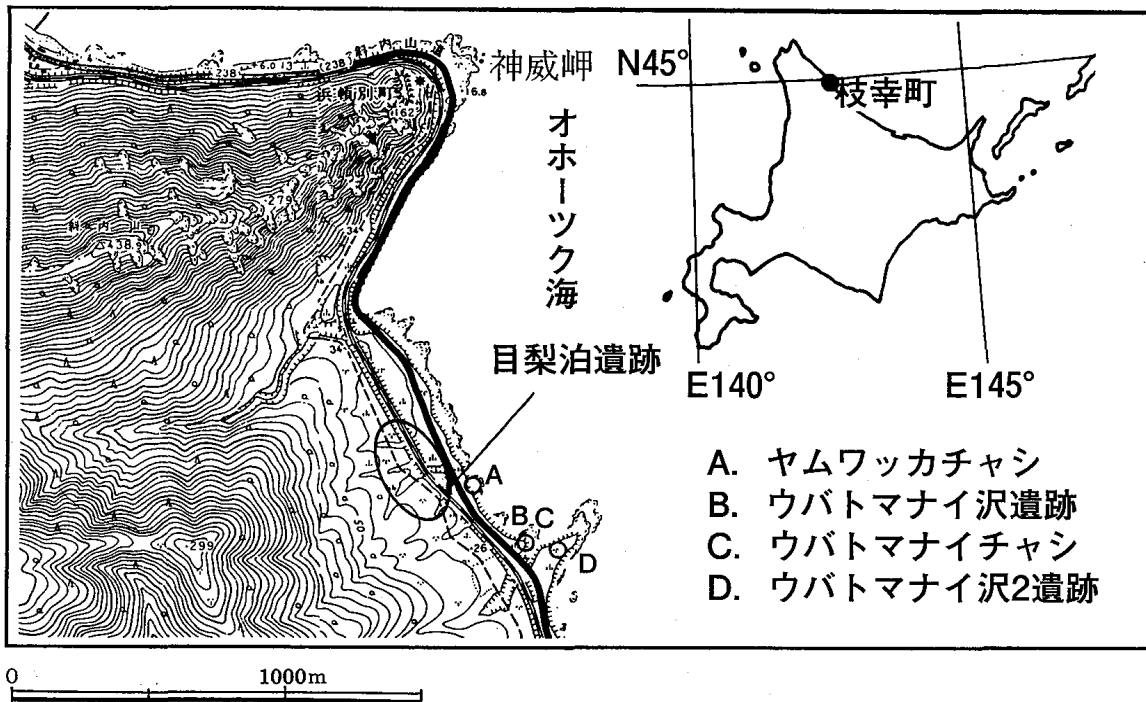


図1 目梨泊遺跡の位置-1/4万

直刀が出土した第7号住居跡は、遺跡の北東寄りにある、狭い舌状平坦面を乗せる第I段丘の先端に占地している(図2)。標高16m代を測り、落差6m余に達する両側の開析谷には海へ注ぐ小川が今も流れる。

### 3. 出土状況

関係する第7号住居跡は長軸9.25m、短軸7.5m、深さ75cm前後の規模を有し、六角形プランを呈する。造営時期は出土土器から推して、オホーツク文化前期の沈線文期と思われる。なお、その編年の暦年代は8世紀頃に比定されている[右代1991]。

その住居跡内北西部の一角、床面から約10cm上にあたる覆土中層にあって、鋒(切先)から20cm辺りで右におよそ120度折り曲げられた鉄刀が、棟(背)を下にして茎尻をN-83度-Wに向けほぼ水平に埋置されていた(図3)。もしくは、遺棄されていた。加えて、北側に60cm弱離れた覆土上層で青銅製刀装具(口金か責金と思われる)がみつまっている。また、東側へやや離れた覆土中に被甕が遺存していた。こうした状況から、埋まりかけた竪穴の窪地を利用した廃屋墓の存在を想定し精

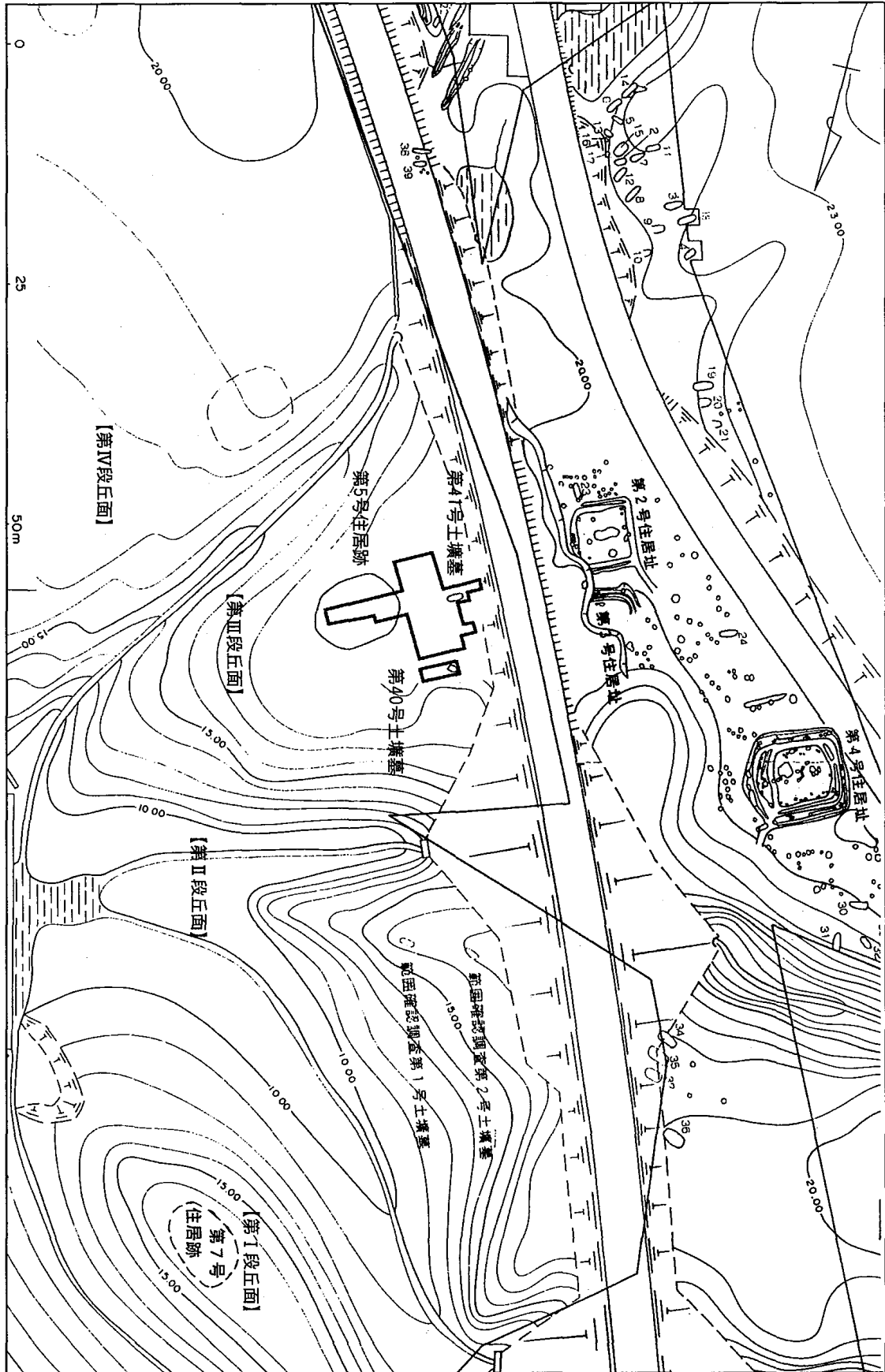


図2 目梨泊遺跡の遺構配置図

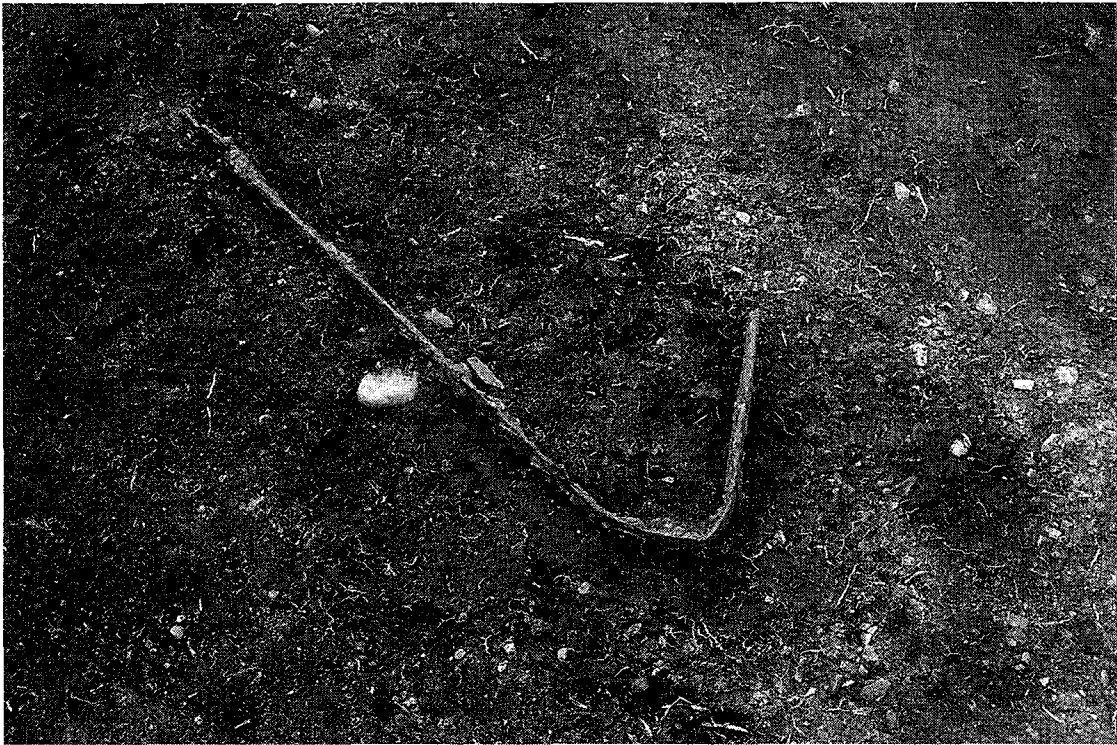


図3 直刀の出土状態

査したが、周囲に埋葬人骨や細礫での被覆（砂利混じりの封土）、墓坑（掘り方）などの証跡は確認されなかった。

#### 4. 出土した直刀

全体に錆がひどく細部は明瞭でないが、平棟平造り、鋒も片刃をなし、全長72cm、刀身長67cm、身元幅30～32mm、重ね（棟の幅）10mmを測る。茎の造りは「均等両区」をなし胴部は「中細」で、茎尻寄りに目釘孔が1か所認められる。鋒の形状は錆がつきフクラのようにもみえるが、X線写真ではカマス切先のようなものである。また、鋒から20cm辺りで右におよそ120度折り曲げられてあった（図4、図5）。

近年発表された古代金属装鉄刀の構造的分析〔福島 2005〕に拠れば、本例は直茎両区鉄刀に相当しよう。目釘が茎尻近く1個に戻り、区の形態は小さく直に落とした両区となり、茎の偏りがあまりみられず全体に平が広くなる。刀身は前代に比べ小型化し、刃渡り60～70cm前後になり、元の平幅も3cmを越えることは少なくなる。また、刀身の形態はカマス

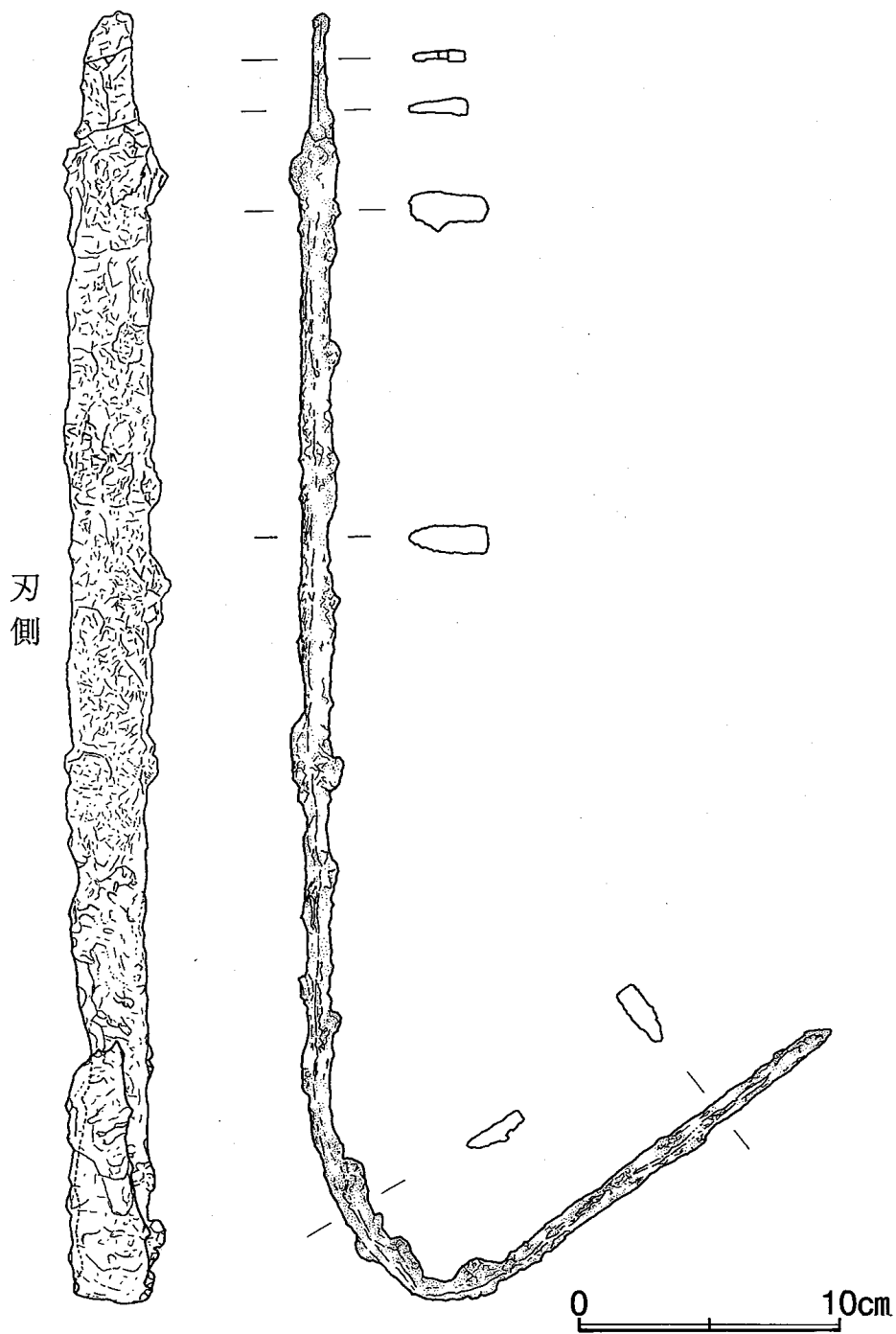


図4 7号住居跡出土の直刀-1/4

切先が増える。その盛行年代は7世紀中葉とみられている。また、先駆けて茎の形態変化に着目した古墳時代鉄刀の編年 [臼杵 1984] でも、7世紀以降に比定される。

本州より将来された直刀の伝世を経ない保有期間と竪穴住居廃絶後の

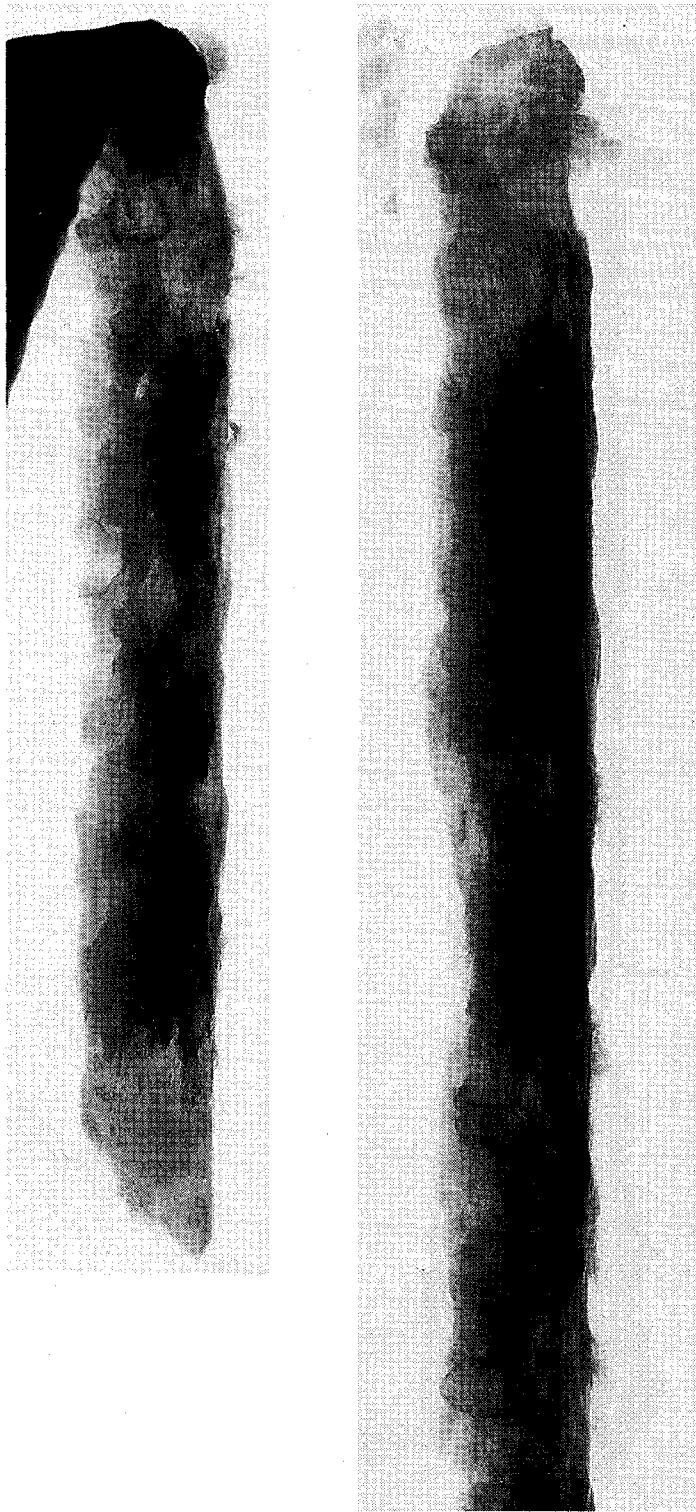
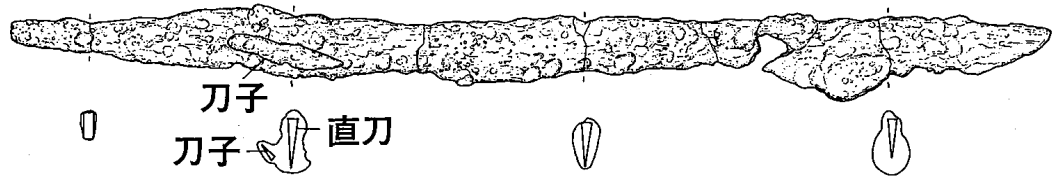


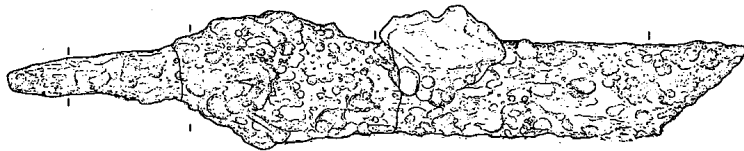
図5 直刀のX線写真-約1/2 鋒部 (左)、上半 (右)

年月を相殺すれば、本品が目梨泊遺跡に将来された時期を沈線文期もしくはその前後の頃に比定して大過ないと考えられる。ただし、本州での

オホーツク文化期目梨泊遺跡住居跡出土の直刀



刀子  
刀子 直刀  
第23号土壙墓



直刀  
11  
第19号土壙墓



第9号土壙墓



第30号土壙墓



包含層出土

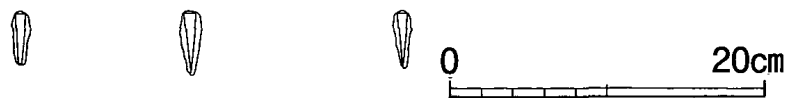


図6 目梨泊遺跡出土の直刀 - 1/7

製作年代と当地への搬入年代に若干のずれが生ずる余地はある。

従前に目梨泊遺跡から出土した直刀（4振）については、報告書〔佐藤 1994〕での各記載のほか、〔森 1996〕や〔高島 2005〕において補訂を交え年代順に概観されているので、記述の重複を避けたい（図6）。

目梨泊遺跡の形成（都合六期）において、第2期にあたる沈線文期に属するとみられる7号住居跡の覆土中から出土した直刀は、佐藤〔1994〕編年a類＝刻文期（第1期）の後葉に属する被甕を伴う第23号土坑墓に副葬されていた直刀に型式上近似する。それは同様に鍔が強く全体の形状は明瞭でないが、平造りで鋒も片刃をなし、全長66.4cm、幅2.7cm、重ね5mmを測り、一回り小振りである。また、報告〔第79図〕には刃と茎を浅い両区で画す形状に復元されているが、保存処理後の形状を確認すると、棟区のみで刃区は明瞭ではない〔高島 前掲:30〕、とされる。なお、実測・復元図には表現されていないが、報告書収載のX線写真〔図版136-d〕には茎の半ばと尻寄りに2か所目釘孔がみえる。この第23号墓の直刀は〔臼杵 1984〕に依拠すれば、浅い均等両区・中細の場合には、7世紀以降の年代が推定される。

他方、モヨロ貝塚の出土品に類例を探すと、共伴した土器の細別時期が不明ながら、〔大場 1962〕の第1図4や第2図13（No.46人骨副葬品）などの直刀が挙げられよう。

## 5. 考 察

近年、高島孝宗〔2005〕は改めてオホーツク文化における威信財の保有について、集成・分類のうえ地域性と年代の両面から分布を検討し、その動態や性格を見事に描き出した。そのなかで直刀に関しても言及している。

高島の要説〔同:32〕を以下に引用すると、蕨手刀や鉄鏃の出土分布と同じく、直刀・曲手刀についても目梨泊遺跡とモヨロ貝塚でその大部分を占有している。鉄鏃と並んで大陸系の遺物と考えられる曲手刀が、刻文期の威信財の中核を担っていたことを示している。一方、より新しい段階の目梨泊遺跡では曲手刀は著しく減少し、本州系と考えられる



様々な型式の刀剣が出現する。森秀之 [1996] は目梨泊遺跡の蕨手刀が比較的短期間に限定されるのに対し、直刀が遺跡の存続期間を通して出現することに注目している。さらに、刀剣の型式的変遷が本州におけるそれと軌を一にしていることを指摘し、目梨泊遺跡と本州との密接な関係を示唆している。森が指摘するように、副葬された刀剣類は、モヨロ貝塚での河野広道発掘b 4墓副葬品をのぞき、ほとんどが鐔や刀装具などを取り去った状態で出土しており、抜き身のまま埋納されたものと考ええる。故人への副葬にあたり、刀としての機能を破壊する儀礼的行為が行われたのであろう。栄浦第二遺跡の折り曲げられた短刀はこうした精神的作用の表れの一つと考えられる。

改めて森 [1996 : 22] の考察を記せば、外装を取り外すことによって大刀の武器としての機能は喪失し、儀器としての象徴的な意味すら大幅に低下するであろう。つまり外装の意図的な損壊という行為には、死者を埋葬するにあたって副葬品の機能を失わせ無価値にするという思惟が働いている、とみる。概ね肯ける解釈であるが、筆者は外来の威信財を伝世させずに故人に帰属させ、その命を絶ってあの世へ一緒に葬り去るという側面を強調したい。

本例においても、まさしく直刀は抜き身で青銅製刀装具とも幾分離れて遺存しており、刀身が折り曲げられて埋置ないし遺棄されていた。栄浦第二遺跡ピット78 [武田 1995 : 170] 出土の短刀は、屈葬により小児を埋葬した墓坑に被甕（擬縄貼付文）と平柄鉄斧とともに副葬されており、本品と同様に鋒寄りて右に約120度の角度に折り曲げられている点で共通性が認められる（図7）。

こうした武器変工の所為は、ほかにも知られる。すなわち、目梨泊遺跡包含層出土の鉄刀 [佐藤 1994 : 第157図14] は茎を欠損するが、柄付近が鈍角に折り曲げられている<sup>\*3</sup>（図6最下）。また、モヨロ貝塚第二地点墓坑出土の直刀や短刀、鉄鉾 [米村 1950 : 図版58] には、概ね180度前後折り曲げられてある例をみる（図8）。加えて「第二地点に副葬されていた長刀は、三つまたは四つに折り曲げられ、あたかもたたまれたようになっていた」 [同 : 63] との記載もあり、まさしく変工の極みと

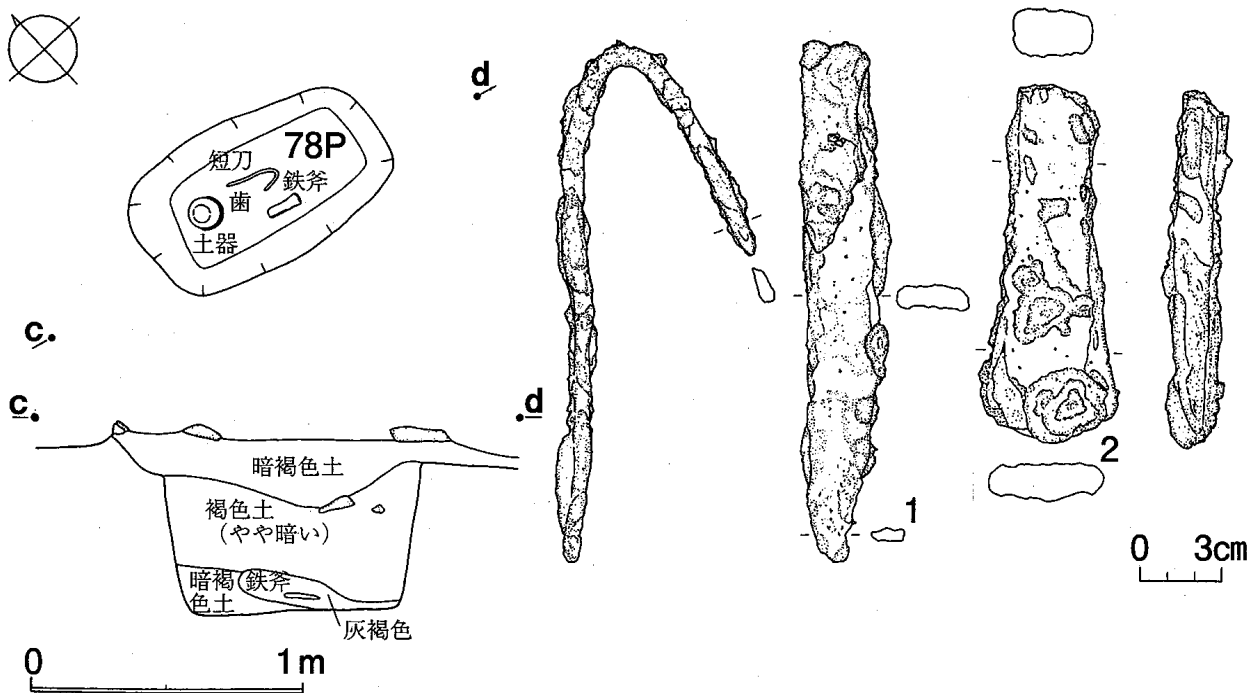


図7 栄浦第二遺跡78号土坑墓-1/40、短刀・鉄斧-1/4

目される。さらに、目梨泊遺跡第1号墓坑の曲手刀〔佐藤1988〕やモヨロ貝塚出土の曲手刀2例〔大場1962：第2～3図6、17〕では茎尻が刀身に対して直角に折り曲げられている。

こうした刀剣に関わる変工の習俗は、本州の古墳文化はもとより道内の擦文文化でもみられないので、オホーツク文化社会の葬送儀礼に特有な風と認められる。ただ、その割合が少ないので、寿命による自然死や老化に伴う病死とは違う異常死や逆縁などの不幸の折が考えられる。その前者の一例として、目梨泊遺跡7号住居跡の出土例のように、折り曲げられた直刀が廃屋の覆土中に埋置されており、しかし埋葬人骨や墓坑が認められない状況からして、一つの可能性としてだが、海獣狩猟や遠出での遭難・行方不明、紛争による戦死などの事態を推測させる。こうした遺体のない葬儀の場合には、故人が生まれ育ったいまや廃屋となった生家を墓にみたと、冥福を祈りつつあの世へ送ってあげたのではないだろうか。その際、通有な慣習である被甕を埋置するとともに、生前保有・管理していた威信財（この場合は直刀）に変工を施し、故人の霊とともに葬り去る所為をとったものと思われる。したがって、一般に本州

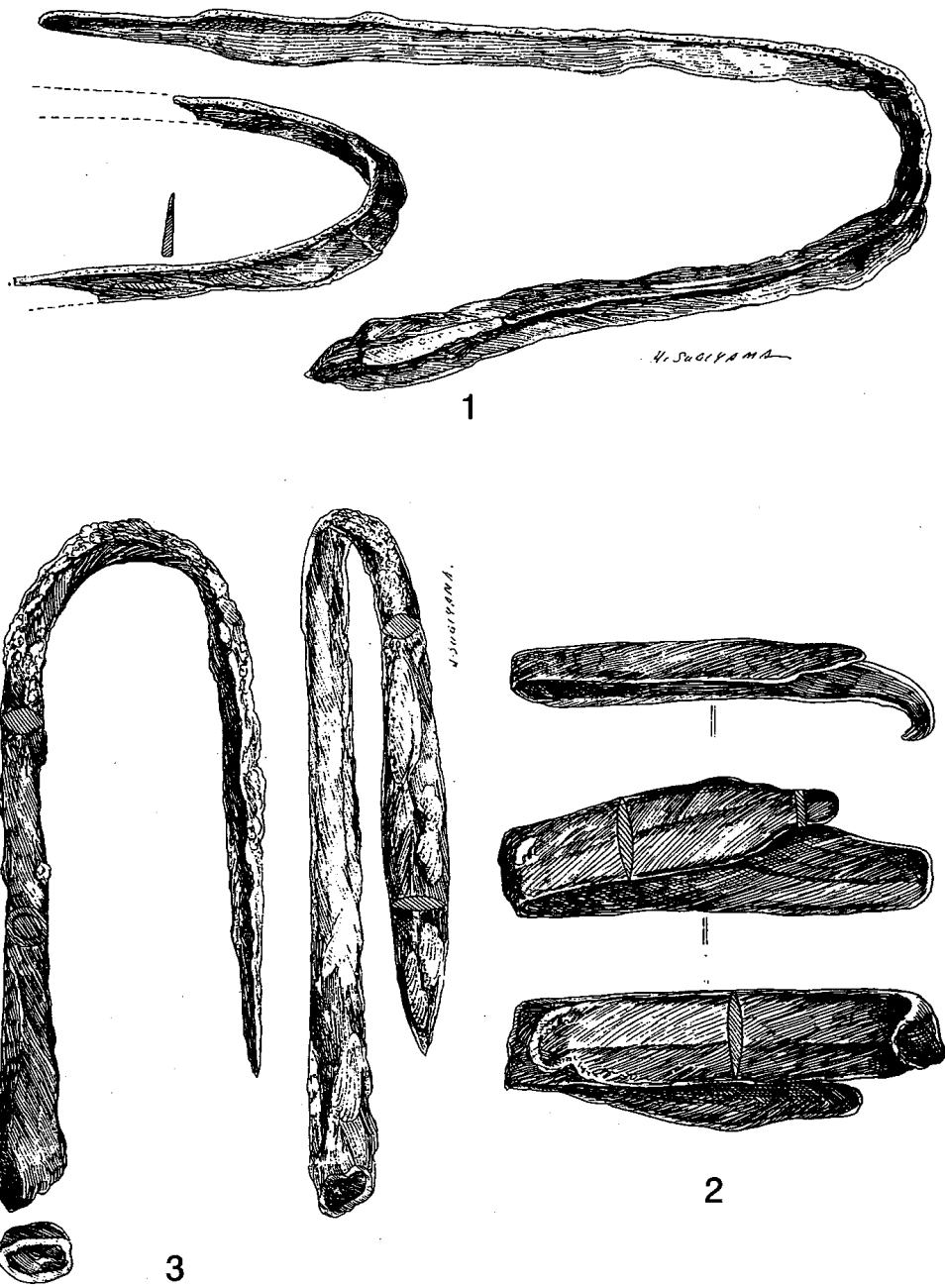


図8 モヨ口貝塚出土の折り曲げられた直刀・短刀・鉄銚-1/4

産もしくは大陸産とみられる外来の金属製威信財は、オホーツク文化社会ではそもそも伝世される社会的価値・性格を帯びておらず、一代限りの保有にとどまり、当該有力者の埋葬に際して副葬された状況が推察できる。

また後者（逆縁）の例として、先にふれた栄浦第二遺跡78号墓坑の短刀（曲手刀に近い）が想起される。被葬者は遺存していた第一乳臼歯の

鑑定により、性別不明ながら4～6歳程度の子どもと考えられている[石田・埴原 1995: 469]。おそらく有力者の家系の愛児と思われ、副葬された短刀は集団の統率者である祖父が管理していた品であろうか。両者の事例は長刀と短刀という違いがあるものの、折り曲げる位置や方向に加え角度まで酷似している。他方、モヨロ貝塚出土の変工諸例に目を転じると、いわば完璧に折り曲げてあり、そこにもモヨロ集団のアイデンティティーや温度差を感じさせる<sup>\*4</sup>。

ちなみに、常温で如上のように折損せずに折り曲げる事は難しく、無理に行なえば背側よりも硬く焼入れされた刃側から多分折れてしまうだろう。したがって、おそらく曲げる部位を7～8百度以上に加熱したうえでの入念な所為とみられ、千度以上に加熱しうるメタル・インダストリー [天野 1985] があれば可能であろう。

さて、森 [1996: 21] は、目梨泊遺跡の土坑墓に副葬された刀剣は、1基あたり1振から2振で、大量に集積された状況でなく個人所有のレベルにとどまるとした上で、本遺跡における四つ（第1～4群）の墓域を計7つの墓域/支群に細分し直し、それぞれに一人ずつ刀剣（直刀・蕨手刀・曲手刀）の副葬を受ける被葬者がいたことを説く。そして、数世代にわたる血縁のような紐帯で結ばれた集団のある一時期の有力者たちが、大刀などの刀剣を各々分有していた状況を推測した。

その後の調査で追加確認された第5群墓域の第40号、41号土坑墓 [高島他 2004] では刀剣の副葬がないが、第5号住居跡周辺やその第Ⅲ段丘面の先端部にまだ墓坑の伏在している可能性を残す。さらに、「これらの墓域に属さない土坑墓」 [佐藤 1994: 184] ないし「孤立した墓群」 [高島他 2004: 54] とされる墓坑群が他に少なくとも5か所認められる。まず、立会調査第1～2号土坑墓が挙げられ、うち立会第1号墓からは小刀が出土している [佐藤 1994: 116]。次いで第2号住居跡の周辺に位置する第23～24号墓があり、うち第23号墓には直刀が副葬されていた [佐藤 1994]。さらに、第Ⅳ段丘面先端部寄りに位置する1987年調査第3号墓坑 [佐藤 1988] があり、隣接するグリッドから小刀 [同: Fig. 40-2] が、また前年の範囲確認調査において約25m前後北寄り、ピット

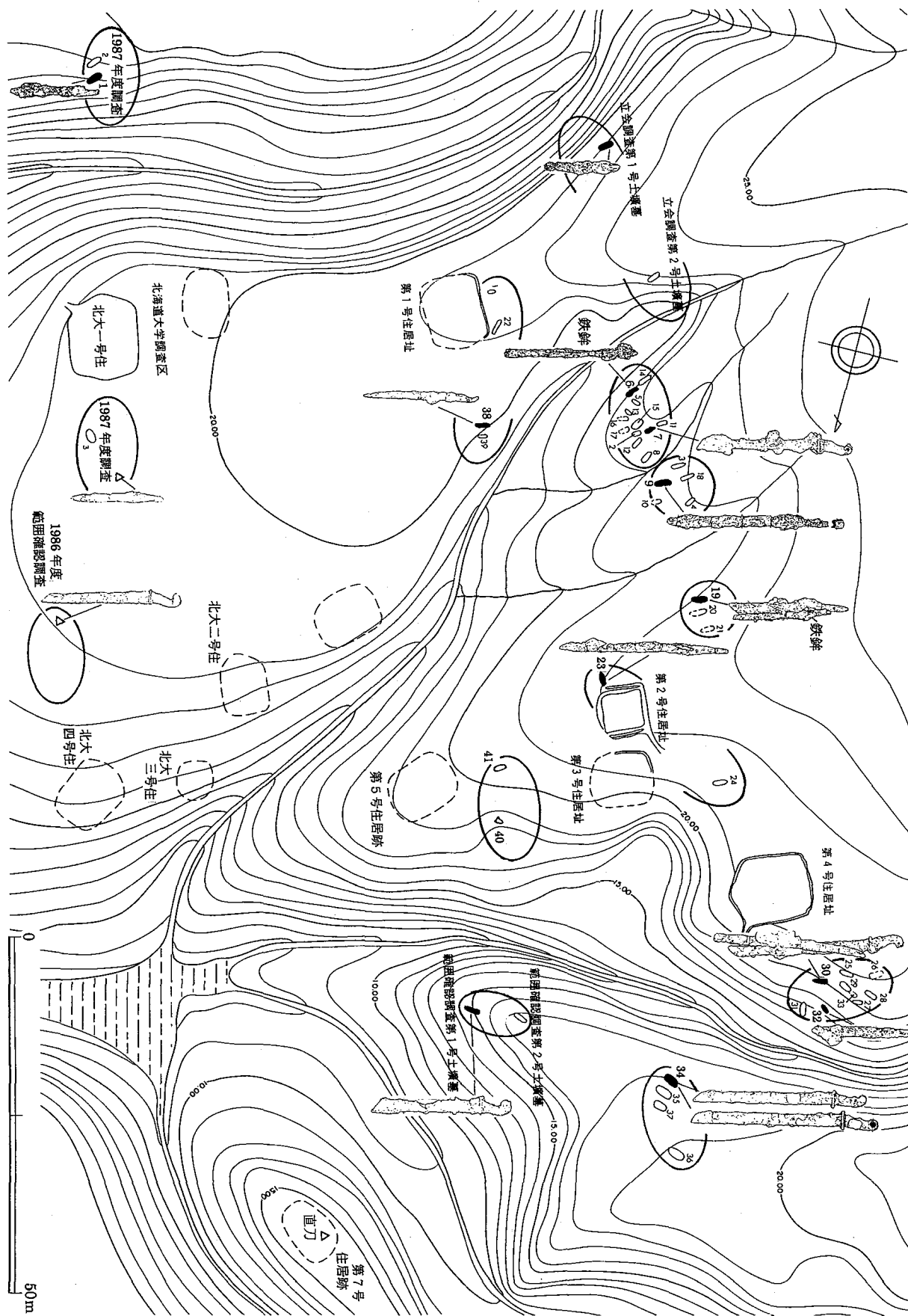


図9 目梨泊遺跡の墓域・埋葬小群と武器副葬

5付近で蕨手刀〔同：Fig.40-1〕がそれぞれ遺構外の第1層から出土している。これら刀剣の発見状況は、「Jトレンチおよび八トレンチ（昭和四六年度調査）この部分は、かつて国道が崩落した折に、その補修のためにブルドーザーで表土を押ししてしまったために、包含層はほとんど残されていませんでした」〔大井1974:34〕との所見と奇しくも符合する。したがって、北大調査区にあたる第IV段丘面先端側にも住居跡（北大調査4軒+竪穴2軒=6軒）に付随して、先の刀剣類が副葬されていた墓を含む墓坑群が存在していた可能性が高い。

加えて、沢を隔てた第V段丘面先端部寄りの縁辺に1987年調査第1～2号墓坑〔佐藤1988〕が設けられており、うち第1号墓坑から曲手刀が出土している。

そして、今回採りあげた第7号住居跡内直刀埋置の事例を廃屋墓とみなせば、目梨泊遺跡における葬墓全体を構成する「埋葬小群<sup>\*6</sup>」は以上より目下都合13余になる。そうした埋葬小群のいずれにも刀剣の副葬された葬墓が概ね単数存在する実相が再確認されるのである（図9）。さらに問題にしたいのは、1つの土坑墓に刀剣・鉄銚などの武器類を複数副えてある葬例がわずかながら存在する事実である。すなわち、第19号土坑墓では鉄刀と鉄銚が、第30号土坑墓では直刀と蕨手刀が、第34号土坑墓では蕨手刀2振がそれぞれ副葬されていた（図10）。しかもその三者が当遺跡の周縁でなく中央部に設けられている事やそうした威信財の組合せが相異なっている点なども見逃せない。前者はこの集落にあって中心的な人物であった事を示唆するし、後者は先代とは違う独自性がそこに表象されているように思える。なお、直刀のほかに平柄鉄斧、刀子、ガラス製小玉が副葬された第23号土坑墓もこれらに準じる性格が賦与されていたとみられる。

報告書〔佐藤1994〕における土器の分類・編年に準拠すれば、出土したオホーツク式土器はa類（刻文）～f類（ソーメン状貼付文）の新旧六期に大別され、造墓はc類（沈線文+擬縄貼付文）の時期を除く五期にわたっている。問題の土坑墓に伴う被甕については、第34号墓が〈擬縄貼付文d-1類〉、第19号墓が〈擬縄貼付文+ソーメン文e-1類〉、

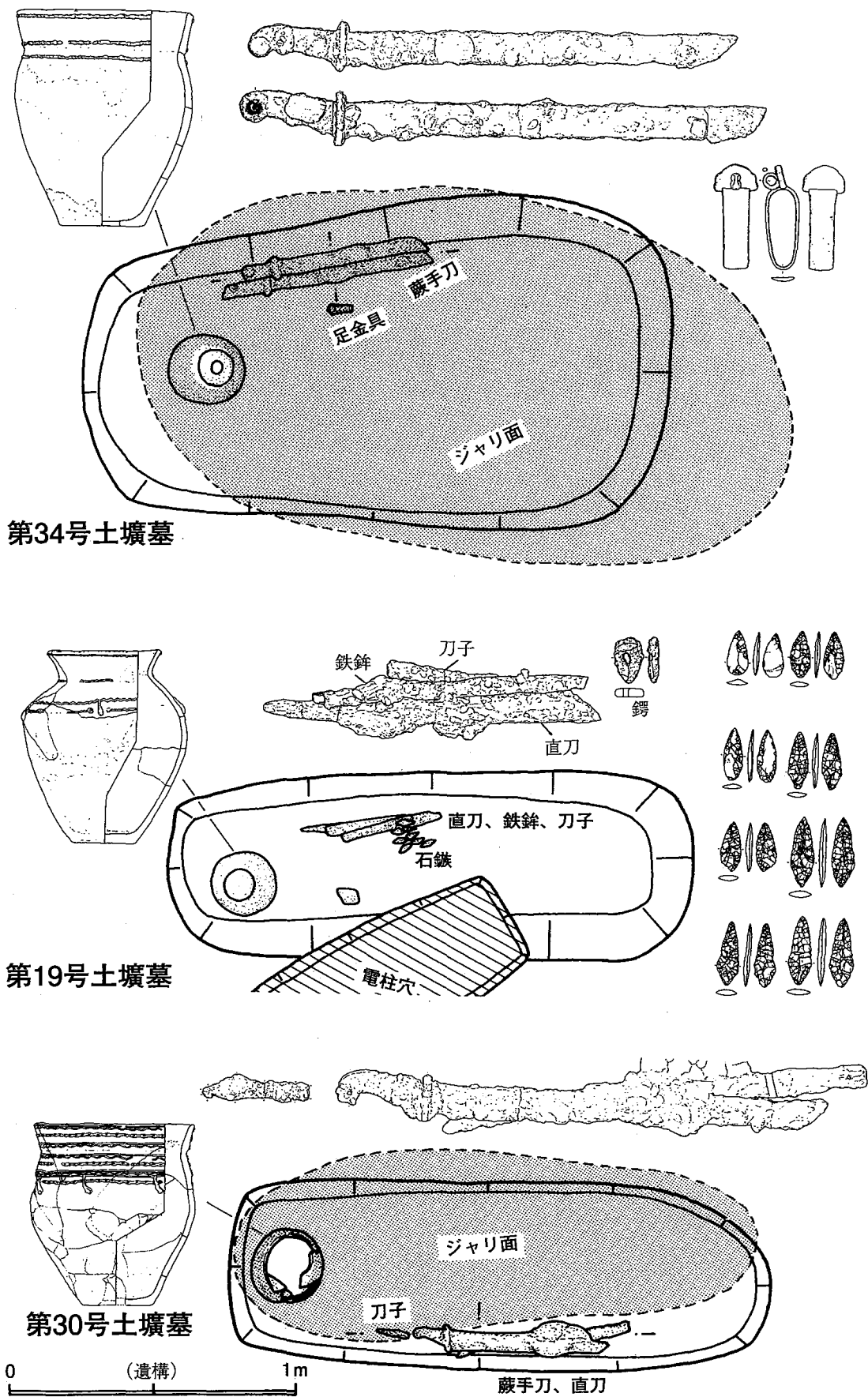


図10 目梨泊遺跡集団の統率者とみられる土坑墓(第34号、19号、30号)  
 - 遺構 1/30、土器・鉄製品 1/12、足金具・石鏃 1/6

第30号墓が〈同e-4類〉にそれぞれ比定されている。こうした別格の葬墓が遺跡の形成期間の後半にあたる大別上の二時期に集中している実態が窺える。なお、これらに準じるとした第23号墓は〈刻文a類〉に比定される葬例で、当集落の開始期ではまだ威信財（刀剣）の保有が複数に達しておらず、そこには過渡的な姿相が垣間見られる。

また、当該墓の副葬品としてはほかに、第19号墓で鏝、刀子、石鏃（弓矢）8点が、第30号墓で刀子が、第34号墓で青銅製足金物がそれぞれ入れられてあり、品目は別々ながら厚葬とみなされる。うち、第34号墓は長軸が2.05m、短軸1.20mと全墓坑中で最大の規模を有しており、あとの第19号墓が長軸1.83m、第30号墓が同1.88mに及ぶ。加えて墓坑の確認面からの深さについても、第34号が48cm、第19号が40cm、第30号が25cmと比してかなり深めである。ちなみに、目梨泊遺跡の墓坑群の平均長軸長は176.5cm、平均深度は24.2cmを測る [高島 2004 : 127]。よって、威信財を複数交えた副葬品目や墓坑の規模からして、伸展位による当該被葬者はいずれも一角の成人男性と推測される。片やその頭位方向について、その年代順に西北西、西南西、西と微妙な差異が設けられている事も付記しておきたい。

以上の属性を総合し解釈を延ばすと、拡大家族の家父長、すなわち各竪穴住居の世帯主に相当する人物が刀剣・鉄鋒などの威信財を分有していた社会状況が考えられ、さらにその集落共同体を統率する最有力者の存在が推測される。この人物は普段には、複数の世帯を含む地域集団<sup>\*7</sup>によるクジラ<sup>\*8</sup>に代表される海獣狩猟を計画的に遂行したり、時には擦文社会や大陸との交易・交渉の表舞台に立ったりする役目を担う長老、あるいは“ビッグマン”<sup>\*9</sup>であったと思われる。上記三者の土坑墓をそうした性格を帯びた長老の一連の葬墓と捉えたい。だが、そこには富の蓄積や占有、政治的権力の形跡はなく、狩猟採集社会の経済的平等性を基礎にして、年齢階梯や技能経験による緩い象徴的な身分階層が存在していたにすぎない。というのは、検出された伸展葬墓は普くほぼ同一の規格・構造を備えた土坑墓であり、副葬品に多少の格差が認められる程度にとどまるからである。しかも、かかる最有力者の血統が固定されていなかった



たとえる証左は、当該三墓の被葬者の頭位方向が微妙に異なっている事実にある。つまり、オホーツク文化のビッグマンは世襲ではなく、世代が代わるごとに2～3軒前後の世帯主退役者がおよそ輪番に担っていった象徴的職能者、言い換えれば集落を代表する統率者<sup>\*10</sup>と考えられる。

ここで目を転じ、モヨロ貝塚の墓に探してみると、発見された30基中6例の木槨墓のなかに、盛り土の上に20個ほどの平石を楕円形に敷き詰めた特異な葬墓がある[米村 2004:44]。副葬品の内容が重要になるが、当例なども地域集団の統率者のものであった蓋然性が高い。

ときに、類似の着想は擦文社会のケースながら、山浦清 [2000:88]によって近年示されている。すなわち、北海道式古墳、あるいは蕨手刀を含む多数の鉄器類が副葬された土坑墓の存在から、共同体成員一部への奢侈品・威信財の集中状況を認めながらも、こうした人々を従前の「首長」層に加え、chief、leader、big manなどに仮定し、その役割として、軍事的指導者、クマ猟などの指導者、交易主宰者、共同体内調停者、祭祀主宰者など多様なあり方を想定する。しかし、彼らが手にした奢侈品・威信財は結局のところ「威信」財であり、シンボリックな意味を持つにすぎず、それ自体が新たな「富」を産み出すものではない。むしろ、擦文文化が生業で固執したように、多くの狩猟採集社会の民族例に知られる互酬的贈与の側面も考えるべきだろう、と説く。首肯できる見解である。

道内における墓坑出土の土師器・須恵器、蕨手刀の分布などを検討したうえで、オホーツク文化に見られる本州産の遺物は道内では石狩低地帯にまとまって分布している実相を鑑み、オホーツク文化に見られる本州産品は直接本州から流入したのではなく、石狩低地帯の人々をクッションとして間接的に流入したのではないか、とする予察がすでに唱えられている[高島 1998a:90]。さらに、異文化との接触に起因した、伸展葬や頭位に特徴づけられる異質な墓制を保持した目梨泊遺跡の集団が、交易の仲介者としての役割を担い、ここを窓口(=再分配拠点)として中心圏であるモヨロ貝塚を含む網走地方へと大陸産品や本州産品が選択的に移動していった状況を想定している[同:95]。なお、鉄製武

具のうち曲手刀と鉄鉾は大陸（靺鞨・女真文化集団）から選択的に供給されたと考えられている [高島 1998 b]。

前田潮も発掘報告書の結語において [高島他 2004 : 57]、目梨泊遺跡を遺したオホーツク人集団は本来の狩猟民としての自給自足的生業活動とともに、当時すでにオホーツク文化社会全体が関わっていたと考えられる広範なネットワークを成立させ、本州および大陸とのおそらく毛皮類と鉄器類の取引を軸とする交易活動のひとつの集約点、トレーディング・ポストとしての位置をこの地に築いたと推考する。

他方、山浦 [2000 : 88] の見解では、オホーツク海集団は、道央部との交易から間接的に蕨手刀などを手にすることができたと理解される。ただし、文化圏を超えたオホーツク式土器の南下、『日本書紀』にみえる阿倍比羅夫北征の記事と「渡嶋蝦夷」「肅慎」の帰属、鳥の羽を木に付けて旗のようにする風習の民族誌的類推などを根拠に、オホーツク人が東北との直接交易によって入手した可能性がないとは言えない、とされる。

翻って、目下例数が限られるが、目梨泊遺跡1987年調査第1号墓坑の埋葬人骨の鑑定 [石田 1988 a・b] に拠れば、その壮年から熟年前半の男性は典型的なオホーツク文化系とはいえ、近世アイヌ的特徴もみられるという。すなわち、わずかながらも擦文文化人が当集落に生活していた様子が窺え、砂利での被覆はもとより南西頭位による伸展葬や被甕（e-2類/第5期）など当遺跡通有の墓制に則って葬送されているのは興味深い。しかも集落の南東はずれに設けられているものの、曲手刀が副葬されているので、被葬者は他所者ながらそれなりの有力者ないしその娘婿になっていたものと推察される。このように、物資の交易だけでなく婚姻などを通じて擦文社会との人的交流がなされていた往時の社会状況が窺える。

最後になるが、オホーツク文化における伸展葬の成立過程を論じた [高島 2004] に拠ると、オホーツク文化圏全体に屈葬墓が広がっていく中で、唯一目梨泊遺跡では伸展葬を主体とする墓坑群を形成する。この伸展葬墓の伝統は、集落の成立当初の段階から存在し、その終末期まで堅持さ

れる。こうした特殊な墓制がオホーツク文化の内部から発生したとは考えにくく、なんらかの外的な影響が背景にある、という。上記の埋葬人骨の系統帰属とも関連するが、遺跡の造営集団の系統や社会背景を考究する上で、注目される分析成果を提示したと言えよう。

## 6. 小 結

まず、互酬的交換によって将来されたと考えられる威信財である刀剣等武器の変工の事由について、異常死や逆縁などの不幸を想定した。

また目梨泊遺跡の墓制を通観して、副葬品の質と量において、特定の葬例に威信財が極度に集中する状況は認められない。集団の統率者といえども、居住した竪穴住居と同様に、威信財の最たる品目である外来の刀剣等武器類を独占し富を占有していたような考古学的証跡は墓制にも見出せない。故に、オホーツク文化の社会組織はいわゆる首長制には当たらず、やはり歴史時代の狩猟採集社会にあって、東北地方の蝦夷勢力や擦文社会などの異文化集団並びに大陸諸民族との交易・交渉を契機として、象徴的身分階層の現出をみたにとどまると理解すべきである。

## 7. おわりに

折り曲げられた大刀に思いをめぐらし、かかる副葬品と不可分な墓制、延いてはそこに反映されるオホーツク文化の社会組織にまでふれることになったが、まだ予察の域を出ていない。さらに総合的に実証的分析を進めねばならないと考えている。

なお後記の助成により、目下その途中にあるが本品の保存処理（脱塩・防錆）を首都圏の専門機関へ依頼することができた。この文末をかりて謝意を表したい。

## 註

- \* 1) 現在、発掘資料の整理途上で、調査報告書は2007年度内に発刊を予定している。
- \* 2) 北海道新聞2005年8月11日朝刊（留萌・宗谷版）に「住居跡から刀

剣出土一枝幸・目梨泊遺跡で札大調査」の記事掲載。

- \* 3) 遺構外の出土のため、本来の旧状かその後の変形によるものか定かでない。
- \* 4) オホーツク文化の墓制において、礼文島、枝幸地方、網走地方、知床・根室地方という地域差が明らかにされてきている [高島 1998a・2003]。
- \* 5) 目梨泊遺跡第41号土坑墓の実測図 [高島他 2004：第16図] に付された方位は向きが逆になっている。[同：第4図] と対照されたい。
- \* 6) 「埋葬小群」の用語は、[春成 1980] より準用した。
- \* 7) 「地域集団」の用語は [大井 1978：96] に準拠した。
- \* 8) 「クジラ猟」の評価については、[種市 2003] が論じている。
- \* 9) ビッグマン (big-man) はメラネシア地域に見出される伝統的な政治的リーダー。その地位は生得的なものではなく、自己達成的で個人の能力と努力によって獲得される。力の源泉としては財の蓄積、儀礼的贈与、弁舌能力などが挙げられる [吉岡 1987]。  
うち蓄財という特徴に違和感があり、時代はもとより環境や生業を異にするオホーツク文化社会にそのまま概念適用する訳にはいかないが、比較的近い類似性から呼称を準用した。
- \* 10) 北太平洋北岸狩猟採集民の階層化社会を事例にリーダー層 (エリート層) の存在が論じられており、同じく高度に水産資源に依存したオホーツク文化は社会階層化の条件を十分満たしている [佐藤 2005]、とされる。

### 参考文献

- 天野哲也 1985 「オホーツク社会のメタル・インダストリーに関する基礎的考察」北方文化研究17 北海道大学北方文化研究施設 19～44頁
- 石田肇・埴原恒彦 1995 「常呂町栄浦第二遺跡・栄浦第一遺跡出土人骨」『栄浦第二・第一遺跡』北海道常呂町教育委員会 468～473頁
- 石田 肇 1988 a 「目梨泊遺跡1号墓坑出土のオホーツク文化期人骨」『目梨泊遺跡』(佐藤隆広編) 65～66頁
- 石田 肇 1988 b 「北海道枝幸町目梨泊遺跡出土のオホーツク文化期人頭骨にみられたアイヌ的特徴」人類学雑誌96-3 371～374頁
- 右代啓視 1991 「オホーツク文化の年代学的諸問題」北海道開拓記念館研究年報19 23～50頁
- 白杵 勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」日本古代文化研究1 古墳文化研究会 49～70頁

オホーツク文化期目梨泊遺跡住居跡出土の直刀

- 大井晴男 1974 「目梨泊遺跡の調査」枝幸教育9 枝幸町教育委員会 31  
～39頁
- 大井晴男 1978 「オホーツク文化の社会組織」北方文化研究12 北海道大  
学北方文化研究施設 93～138頁
- 大場利夫 1962 「モヨロ貝塚出土の金属器」北方文化研究報告17 北海道  
大学 165～196頁
- 菊池俊彦 1976 「オホーツク文化に見られる鞅鞆・女真系遺物」北方文化  
研究10 北海道大学北方文化研究施設 31～117頁
- 佐藤隆広 1988 『目梨泊遺跡——一般国道238号線枝幸町地内カムイ道路改  
良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』枝幸町教育委  
員会
- 佐藤隆広 1994 『目梨泊遺跡——一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書』枝幸町教育委員会
- 佐藤宏之 2005 「クマ送り儀礼に見る社会的威信と階層化社会」『社会考  
古学の試み』同成社 193～204頁
- 高島孝宗 1998 a 「オホーツク文化の墓」環オホーツク5 (第5回北のシ  
ンポジウム1997 環オホーツク海文化のつどい報告書)  
紋別市立博物館 81～95頁
- 高島孝宗 1998 b 「オホーツク文化における大陸系遺物の分布について」  
月刊考古学ジャーナル436 11～15頁
- 高島孝宗 2001 『目梨泊遺跡—第3次発掘調査概要報告書』枝幸町教育委  
員会
- 高島孝宗 2003 「オホーツク文化の信仰と儀礼」『続縄文・オホーツク文化』  
(新海道の古代2) 北海道新聞社 162～181頁
- 高島孝宗 2004 「オホーツク文化における伸展葬の成立過程について」  
『北方世界からの視点』(佐藤隆広氏追悼論文集) 北海  
道出版企画センター 119～138頁
- 高島孝宗 2005 「オホーツク文化における威信財の分布について」『海と  
考古学—海交史研究会考古学論集』六一書房 23～44頁
- 高島孝宗・前田潮・川名広文他 2004 『目梨泊遺跡—目梨泊遺跡における  
埋蔵文化財学術発掘調査報告書』枝幸町教育委員会
- 武田 修 1995 『栄浦第二・第一遺跡』北海道常呂町教育委員会
- 種市幸生 2003 「オホーツク文化のマリタイム・アダプテーション」『想  
い北に馳せて』(木村尚俊さん追悼記念文集) 同文集刊  
行委員会 85～96頁
- 春成秀爾 1980 「縄文合葬論」信濃32-4 信濃史学会 1～35頁
- 福島雅儀 2005 「古代金属装鉄刀の年代」考古学雑誌89-2 47～75頁
- 森 秀之 1996・97 「擦文・オホーツク文化期の出土刀剣に関する覚書(1)

(2)」紋別市立郷土博物館報告9・10 15～23頁・33～44  
頁

山浦 清 2000 「続縄文から擦文文化成立期にかけての北海道・本州間の  
交流」『交流の考古学』（現代の考古学5）朝倉書店 73  
～94頁

吉岡政徳 1987 「ビッグ・マン」『文化人類学事典』弘文堂 627頁

米村喜男衛 1935 「北海道網走町モヨロ貝塚中の人骨埋葬に就いて」人類  
学雑誌50-2 47～56頁

米村喜男衛 1950 『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館（野村書店）

米村 衛 2004 『北辺の海の民 モヨロ貝塚』（シリーズ遺跡を学ぶ001）  
新泉社

### 挿図典拠

- 図1 高島 2001：1頁第1図を転載・加筆
- 図2 高島他 2004：5頁第3図を転載・加筆
- 図3 筆者撮影
- 図4 初出（刀身の断面形と復原図は未記載）
- 図5 JFEテクノリサーチ（株）分析・評価事業部による撮影
- 図6 佐藤 1994：第79、70、52、93、157図より順に転載・加筆
- 図7 武田 1995：第131、132図より転載・構成
- 図8 米村 1950：図版58より転載
- 図9 佐藤 1994：附図2を下図に、森 1996：図5、高島他 2004：第29図を  
参考に作成
- 図10 佐藤 1994：第68・70、91～93、99～101図より転載し構成

（本稿は2006年度札幌大学研究助成一個人研究—による成果の一部である）